【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻　文化資源論講座　無形文化資源論分野
浅田　和泉

【論　　文　　題　　目】　中国人日本語学習者による多義的副詞の習得に関する研究

【授与する学位の種類】　博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、中国語母語話者に対する日本語教育において、初級段階から教える必要のある使用頻度の高い副詞にしばしば見られる多義性と、それに応じた語順などの文法的性質の違いを、音声的実現の違いに着目することによって整理し効果的に習得させる方法を提案し、その試験的実践の成果を標記の題目でまとめたものである。

論文は、序論と結論を含む６章から成り、第２章で日本語教育分野における副詞の教育法に関する動向をまとめ、第３章と第４章において、副詞教育の中国人日本語学習者への効果に関する実証的分析により現状の問題点を示し、第５章においてこれらの問題点を踏まえた教育法を提案し、実践結果に基づいてその有効性を検証するという構成である。第２章では副詞について教育法が体系化されておらず、他方、近年の音声教育でも副詞の音声による多義が取り上げられないことを述べる。実証的現状分析の部分では、中国と日本国内の日本語教育機関で実施した副詞理解度調査に基づいて、これらの学習者が副詞の意味の理解に音韻情報を参照しておらず、また、その出現する音韻環境に応じた語順の自由度の違いの理解度が低いこと、また、日本国内で日本語に日常的に接している学習者は音声の区別の有無の知覚の点では向上していても、そのことが意味や文法的性質の理解に結びついていないことを示す。これらの問題に対処するために考案した教育法の実践は、日本国内の日本語教育機関において短期間で集中的に実施されたもので、副詞の意味の違いと音声的実現の違いを明示的に関連付けて指導することにより、副詞ごとの意味に応じた音韻的性質の習得に効果があったことを報告する。

本論文は、一般音韻論分野における韻律構造論の進展を参照した上で、語単位でのアクセント指導にとどまらず、句レベルでの音韻的なまとまりに着目した音声指導を提案するものであり、音韻論上の構造と構文論上の構造との関係に関する知見の動向を踏まえて音声指導と文法指導を連関させる試みであるといえる。近年の言語教育においては、技術的な要因もあり、音声教育への関心が高まっているが、漠然と母語話者の音声を聞かせることだけではなく、フレージングのような特定の音韻現象に着目させ、かつそれによる意味の違いや語順制限との関係を理解させるといった特定目的での教授法と音声教材の開発にも資すると考えられる、新たな視点を提供するものである。学習者の副詞理解度の現状に関する実証的分析は、統計的に信頼度のあるデータをそろえる必要上、中国語を母語とするもののみに対象を限定した調査に基づいており、このために標題も中国人日本語学習者に限定したものとなっているが、提案されている指導法は、中国語母語話者のみを対象とするものではなく、日本語教育における副詞の指導に普遍的に応用しうるものである。

本論文は、日本語教育分野のみならず、日本語学・言語学における副詞や音韻に関する理論的研究をじゅうぶんに踏まえた上で、日本語教育の現場においての応用効果という観点からこれらの理論を批判的に吟味し、新たな教授法を提案したものであると言え、博士論文として適格であると判断できる。

【最終試験の結果の要旨】

博士学位論文『中国人日本語学習者による多義的副詞の習得に関する研究』に関して、平成22年1月21日に学位論文審査委員会委員全員出席による口頭試問、次いで、平成22年1月23日に学位論文公開発表会を実施した。

口頭試問においては、浅田和泉氏による論文要旨の口頭説明を大筋で了解した上で、補足的な説明を求めた。中国人日本語学習者の習得を対象とする研究ではあるが、取り扱われている問題点は日本語教育全般に関するものであることが確認された。日本語教育における副詞教育の位置づけについての質問に対しては、日本語教育の現場において初級段階から困難な課題であることが詳細に説明された。論文で提案されている教授法については、これに基づく音声教材の開発を念頭においていることが確認された。その他、今後の発展課題としていくつかの提言があった。

学位論文発表会においては、論文全体にわたる40分間のプレゼンテーションの後、提案され実践された音声教育を用いた副詞指導について、その内容についての質問がいくつかあり、具体的な説明が行なわれた。日本語学習者に対する音声指導について、方言差が大きい日本語の音声教育においては、具体的な音声よりは、フレーズのまとまりのような意味の弁別や語順に影響する機能的な違いの指導が優先されるべきであるとする論点があらためて強調された。

以上の口頭試問と学位論文公開発表会において、博士学位論文の論点はじゅうぶんに明らかにされており、合格と判断する。

【審査委員会】

主査　児玉　望

委員　森　　正人

委員　千島　英一

委員　朴　　美子

委員　福澤　清